

## 「文化としての学術」

### —第 15 期日本学術会議における審議の経過—

近藤 次郎 (第 15 期日本学術会議会長)

日本学術会議の第 15 期では文化としての学術特別委員会を組織した。この委員会の委員長には宅間宏第 4 部会員、幹事に田口第 3 部会員、光岡第 6 部会員を当てて、1 部から 7 部までそれぞれ 2 名ずつの構成であった。ところがこの特別委員会は 3 年間に 13 回の会合を持ったにも係わらず、結局結論を得るに至らず、更に報告書すらも全員のコンセンサスが得られなかった。そのため報告書を公表することができなくなってしまい、わずかに内部資料として 21 世紀の文化における学術の役割を平成 6 年 7 月 19 日付けで発表したに過ぎない。従ってその内容は一般には公表されずに終わってしまった。

このような結果になったのは結局文化という用語の定義とか、学術に対する委員のバックグラウンドが哲学、史学、文学、法学、経済学などの人文社会科学から理学、工学、農学、医学などの自然科学に至るまで広い範囲に及んだ為に、文化という言葉の理解がそれぞれ異なっていた上、各自の携わる学術そのものも違うためでもある。委員長の総括では、第一に人類の知的好奇心を満たす欲求に基づくすべての活動を学術と定義し、その均整のとれた発達を計る点が必要である。この必要性を社会に納得させるために学術会が努力をすべきであると述べている。またその中で創造性が大切であるとする一方で、現在の学術の動向としては環境問題、エネルギー問題、人口問題など人類の存亡に係わる深刻な問題に対して、パラダイムの転換の時期にある。学術がここで大きな役割を果たさなければならない、と主張している。

これに対して各委員の中には、これは結局第 4 部 (理学) の主張を全委員に強引に納得させようとするものであるといった意見や、とにかく委員会を横成して 3 年間も討議した以上その成果は公表すべきで、公表する一步手前で、反対意見を述べてもそれは必ずしも建設的でない、という反省の弁など各委員がそれぞれの立場で、妥協の困難ないろいろな意見を述べた。

そもそもこの委員会は渡辺副会長の発議によって創設されたものである。渡辺氏は第14期では‘人間の科学’特別委員会を作って議論し、学術のあり方を審議したが、それは成功したとは言えない。そこで、学術そのものが文化である、この場合の文化はカルチャーとでも言うべきものであろうが、学術というのは人文社会科学および自然科学の如何を問わず、また応用と純粋の区別もなく、それ自体が文化であり、その結果人類が今日の繁栄を遂げたものであるという認識で、会長もその意見に同意したのである。

即ち現在は独創性ということが叫ばれ、日本は世界に対して学術的に貢献すべきである、それは基礎科学ただのり（フリーライダー）と言うのではなくて、もう少し人類の知的財産の拡大に貢献すべきであるという意見とか、世界に貢献するように日本から学術の発信を行う必要があるという意見などもよく云われている。当時は、そして現在でも文部省の学術審議会、或いは科学技術会議において基礎科学の重要性が叫ばれている。この点は企業においても同じである。しかし、ここで基礎科学尊重と言うのは、いわゆる利益追従という立場ではなく、純粋に利益に無関係なものを尊しとする考え方である。

確かに科学の発達の事例を調べてみるまでもなく、科学者は純粋に自然の法則を探求し、それを解明することを目的とした。その後近來では、これを応用して巨大な産業が成立したという事実が多い。しかしながらもしそうならば、錬金術から化学が発達してきたという事実や、純金と合金と判別するためにアルキメデスが浮力の原理を発見したという物理学などはその動機が不純で科学ではないとでも言うのであろうか。確かに中世の暗黒時代の星占いに代わるものとして、天体の運行を説明する天文学の発達などは、利益を追及するものではなく、純粋的な知的好奇心に基づくものであるということができるかも知れないが、これも天文学や暦の発達などは農耕や迷信を避ける目的で研究された面も見過ぎず訳にはいかないであろう。

近ごろは新しい発明発見が直ちに企業の利益、新製品につながる。従ってその利益の拡大につながることは広く認められるところである。しかしながら、学問をすることが、直接利益につながると思っている人は、企業の経営者の一部を除いては極めて少ないのではないだろうか。また、学問をすることの中に生きがいを見だし、その中に尽きぬ喜びを感じずる人も多いはずである。そしてこの「学問をする」という言葉そのものが死語になっている。ここであえて「科学」とか「学術」とかという言葉を使わずに、「学

問」といったのは、それだけで一般の人が心に思い浮かべるものを指していて、決して特定の自然科学や、或いは哲学のみを指しているのではない。

また必ずしも創造性ということのみを重視するのではない。もしそれならば例えばノーベル賞につながらなかった学術研究は果たして無価値、無意味なものであろうか。人間は食事をしたり、寝たり、夢を見たり、スポーツや碁・将棋などに凝ったり、絵や音楽を聞いて楽しんだりいろいろなことをやっている。しかしその中でいわゆる「学問をする」、言葉を変えれば「勉強する」ことに意義を感じ、楽しいと思う心が今は失われているのではないであろうか。

学術会議が 15 期に世の中にアピールしたかったことは、”学問をする”、その言葉自体が今や死語になってしまっているが、学問をするということに生甲斐を感じず、或いは学問をするということが“粹な”ことであるという風潮を世の人に理解してもらいたかったからである。それは必ずしも経済的利益につながるものではない。例えば紫式部の源氏物語を勉強してそこに出てくる言葉の意味を解釈してみたところで、それが必ずしも独創にはつながらず、また多少の国文学研究上の進歩はあったとしても全巻を著した原著者には遠く及ばないであろう。それにも係わらず多くの人たちが源氏物語を読んで、それぞれに、ここで使っている「いとかなし」という文句はどのような文脈であり、また情景を表しているのかと想像を逞しくして議論している。それはなんら生産的なことではなく、一つの遊びである。文学ではなくて一種の雅（みやび）と言うべきであろう。

この雅の心のようなものが学問をするという時の心意気でなければならない。これは古典だけではなく自然科学の研究についても同じである。即ち学問研究というものは、ある意味では極めてリスクの高いものである。多くの楽しみを犠牲にしてこれに一生を捧げても、自己満足だけで客観的に見れば、結果として何も創造できていない場合もある。学問に身を捧げそれに没頭することは、農業や工業の生産に励んだり、商売に努力したりすることとは違って、物質的な豊かさとは直接的につながらない。のみならず多くの場合は間接的にも物質的豊かさすら満足できないことも普通である。しかしながらそういった人生もあってもいいのではないかと考える風潮を、今少し世の中に広めたいものである。日本からノーベル賞が出ないといって悔しが人は少なくない。しかしそれは大勢の科学者がいて初めてその中に、いわゆるアタル、またはアテル人が生まれる

のであって、ノーベル賞受賞者といえども誰も最初からノーベル賞をとろうと思って学問研究に勤しんでいるわけではないであろう。大事なことは学問をするという生き方についてもそれはそれで意味があることであると多くの人が思い、且つまたそのような人を尊敬する風潮が世の中にあることがいちばん大切である。

明治時代には夏目漱石が東大教授の席を擲って朝日新聞社に入り、小説をもって身を立てる決意した。これは大きな出来事であった。しかし現在は大学の数が明治時代の何十倍にもなり、また大学生の数にしても日本中で約 40% 近くの若者が短大も含めて大学教育を受けている。大学の地位が相対的に低くなったことは否めない。大学教授のポストを投げ捨ててテレビのタレントになる人も出てくる。私はここでどちらがランクが上であるということを述べているのでもなければ、大学教授をもう少し尊敬すべきであると訴えているわけでもない。そのような人生もあるのだということ、そしてそれはそれとして意義があるということなどをどのようにすれば一般の人の理解を得るかということをも日本学術会議として審議して欲しかったのである。

しかしながらいづれにしても会長があまり指導力を発揮すると返って結果はよくない。このことは 13 期以来の経験によりよく知っているのも、ある種の期待を持っていた。その解答は用意していたものの、これを押しつけるようなことはあえてしなかった。それにしても 3 年間の審議の後何等の対外報告も出せなかったというのは、最終的にはやはりこのような特別委員会を設置する提案を行った会長の責任であると考えている。

多様な会員から構成される学術会議で、しかも委員の選定すら各部のそれぞれの協議に任せているという現在の体制ではやむを得ないことであったのかもしれない。